

佐久考古通信

発行：2019. 4.20 佐久考古学会
小諸市御影新田 1945-6 桜井秀雄方
今号の編集担当 堤 隆
今号の編集協力 中村耕作

遺跡と考古学を学ぶためのコミュニケーション誌：長野県佐久地域における考古遺跡・遺物からのアプローチ

特集 佐久地方の釣手土器

2018年9月27日川上村大深山遺跡と御代田町宮平遺跡から出土した釣手土器各1点が、
「信州の特色のある縄文土器」の一例として、長野県宝に指定された。
そこで今回は、縄文中期の異形の造形ともいえる釣手土器について特集した。



釣手土器とは、鉢の上に覆いがかかる土器で、縄文中期中葉（約5200年前）の八ヶ岳南麓で誕生したとされ、そのルーツは顔面把手にあるとされる。分布の中心は長野・山梨など中央高地にあり、南関東や北陸地方まで波及する。中央高地では中期末葉で消滅するが、周辺地域では、後期初頭まで残る場合がある（本誌中村論文参照）。

出土総数は、中村耕作によれば現在国内で450例が知られており、綿田弘実によれば長野県内で172例があるという。佐久地方ではここで特集する10例が確認される現状である。

釣手土器は、一般的な深鉢のようにひとつの住居から多数が出土するという状況を示さず、縄文集落を発掘しても1～数個のみという希少性をみせている。つまり普段使いではない特殊な器ということになる。祭祀目的である事は明らかであろう。

その覆い部には、顔面装飾がなされたり、ヘビ・イノシシなどの動物装飾がなされたりする。

その用途については、藤森栄一がランプ説を唱えており、研究者間では、おおむね肯定的に受け止められている。

■ 佐久地方の釣手土器出土の主要遺跡

- 大深山遺跡（川上村） 4点
- 坂上遺跡（北相木村） 1点
- 勝負沢遺跡（佐久市） 1点
- 寄山遺跡（佐久市） 1点
- 郷土遺跡（小諸市） 2点
- 宮平遺跡（御代田町） 1点

★ CONTENTS

- 釣手土器とは何か……………中村耕作… 2
- 北相木村坂上遺跡の釣手土器……………藤森英二… 5
- 大深山遺跡の仮面様香炉形土器……………長崎 治… 6
- 3つの釣手土器……………堤 隆… 8
- 郷土遺跡の釣手土器……………桜井秀雄… 12
- いわゆる郷土型釣手土器と他の一例……………堤 隆… 14
- 御代田町宮平遺跡の釣手土器……………堤 隆… 16



釣手土器とは何か

— 縄文文化理解における意義 —

中村耕作

1 顔面・身体装飾とその打ち欠き

縄文時代中期中葉～後葉、鉢の上に覆いを持った独自の土器器種である釣手土器が出現する。単に特殊な造形というのみならず、そのあり方は、縄文文化を理解するうえで重要な意義をもっている。なお、香炉形土器や吊手土器と呼ばれるものもあるが、系統的に連続する一群であり、統一して釣手土器と呼びたい。

中期中葉の中部高地では、深鉢・有孔鏝付土器など様々な器種に、いわゆる人体文・顔面装飾、あるいはヘビ・イノシシその他の動物装飾がリアルな形で付される。このうち、釣手土器のみは中期後葉にもリアルな顔面装飾が残る。また、Ⅱ期以降、円文・渦巻文・W字文など抽象的な単位文様が多く付されるが、その位置関係から、当初の顔面・身体装飾を継承しているとされる（小野 1989）。

加えて釣手土器の基本形そのものが顔面・身体を表している。すなわち、出現期の釣手土器は、顔面把手の顔面部分を打ち欠いた形をモデルとしている（鳥居 1924）。その証拠に、顔面把手とⅠ期の釣手土器は、円文・三叉文・区切文・玉抱き三叉文などの文様の組み合わせを、顔の上や後頭部の装飾として共有する。

さらに興味深いことに、1つの器種として釣手土

器が確立する中で、再び顔面装飾が付されることがあるが、この顔がまた破壊されることが多い。そうした意味で、極めて象徴性の高い器物なのである（中村 2013）。

2 短命・狭域分布・稀少性

釣手土器は、中期中葉の八ヶ岳南麓で出現した後、西関東・中部高地一帯に広まり、最終的には東海・北陸まで分布を広げ、中部では中期後葉のうちに終焉を迎える。

そもそも縄文土器は鍋（深鉢）として出現し、やがて前期には盛付具（浅鉢）、貯蔵具（壺）が加わり、後期には注口土器が定着するように、ある役割に特化した形をもった器種が少しずつ分化し、その後引き継がれていくが、釣手土器の用途は前の時期から継承したものではなく、また次の時期にも継承されない。

さらに、分布範囲内でも、多くの場合は1遺跡1～数個のみ出土という稀少性から、当時の社会において極めて特殊な用途を担ったものと推定される。他の器種のように、利便的な形態として出現したのではなく、顔面・身体の象徴的意味を強くもっていたため、観念的意味を共有しない限り、広がらない存在であったのだ。

こうした特徴は、縄文時代後期以降の釣手土器、香炉形土器、下部単孔土器、異形台付土器などにもみられ、複雑化した地域社会に特有の現象とみられるのだが、中期の釣手土器はその先駆けとして重要である。

3 特殊な用途

藤森栄一（1965）の先駆的な研究以来、その用途は「神の灯」とされてきた。即ち、明かり取りとは違う、神聖な火を灯すものという理解である。実は藤森自身が根拠とした事例は、後の検証によって火を灯したものとは考えられないことが指摘されている。しかし、その後の多くの事例観察によ



郷土型の参考例（表・裏）

図1 久保在家遺跡（東御市）
（東御市教育委員会蔵）

て、鉢や橋に一定のススの付着パターンがあることが明らかにされており（新津 1999、諏訪市博物館 1999、釈迦堂遺跡博物館 2009）、ランプ説は定説化している。

しかし、宮平遺跡例は鉢外面に分厚い炭化物が付着するほか、主窓下部に吹きこぼれの痕跡が残っており、堤隆（2010）は外部からの煮沸を想定している。

これは特殊な事例なのであろうか。筆者自身の経験によれば、内面の観察に比べ、黒色を呈する外面の煮沸痕の判断は難しいと言わざるを得ない。釣手土器は複雑な形状を呈しているためか、あるいは火災住居出土例のように火にかけられたためか、通常の土器よりも焼成が甘い場合がある。外面の炭化物の状況については観察報告例は少ないが、一般的には鉢部分に限って言えば、宮平例のような炭化物の厚い付着は見られない。

吉田邦夫・宮内信雄による炭素・窒素の安定同位体・脂質の化学分析は、まだ事例数が限られているが、現状をまとめた宮内（2019）によれば、宮平例を含め釣手土器内面の付着物の同位体比は、深鉢

とは異なった一群を形成している。その由来は脂質に富んだ C3 植物、それを食べる動物、それらの混合物と推定され、宮平例の脂質分析によれば C3 植物に絞られる可能性が高いという。

このように深鉢とは異なる用途という想定が支持

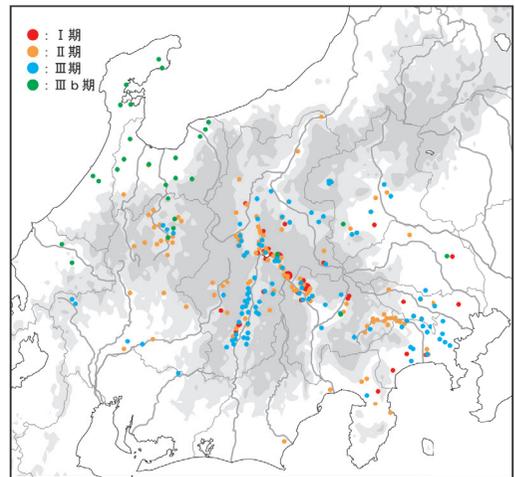


図2 釣手土器の広がり

I期は同時期の顔面把手の分布と重なる関東西部～伊那を中心とし、II～III期に分布域を広げるがIII b期に盛行する北陸を除いて関東・中部では衰退する。

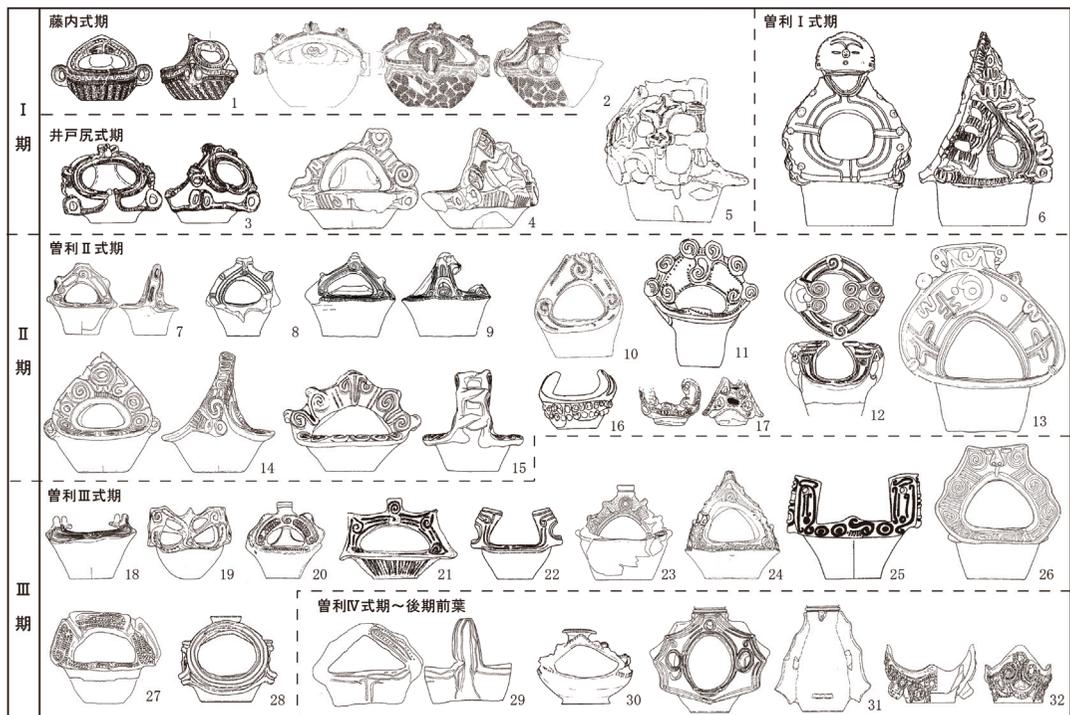


図3 釣手土器の諸形態

- 1: 藤内(長野) 2: 札沢(同) 3: 熊久保(同) 4: 久野一本松(神奈川) 5: 床尾中央(長野) 6: 御殿場(同) 7: 町東側(同) 8: 野呂原(山梨)
 9: 小比企向原(東京) 10: 堂ノ前(岐阜) 11: 海戸(長野) 12: 花上寺(同) 13: 上木戸(同) 14: 中島(同) 15: 大門原(同) 16・22: 伴野原(同)
 17: 宮ノ脇B(岐阜) 18: 三尋石(長野) 19: 三口神平(山梨) 20: 塚越北(同) 21: 辻沢南(長野) 23: 武蔵台東(東京) 24: 市ノ沢団地(神奈川)
 25: 坂井(山梨) 26: 宮平(長野) 27: 大砂(愛知) 28: 東黒牧(富山) 29: 根吹(長野) 30: 真脇(石川) 31: 境A(富山) 32: 北塚(石川)

されており、今後のさらなる研究が望まれる。化学分析例を増やすことはもちろん、今回の化学分析の結果は、ランプ説の根拠となってきたスと、煮沸説の根拠である宮平例のスの成因が共通する場合・しない場合の双方を改めて検討する必要性を示している。

4 地域による扱い方の継承と変容

—佐久を中心に—

釣手土器に限られた分布である理由として、造形と用途の特殊性を挙げたが、分布範囲内においても取り扱われ方は同一とは限らない。時期・地域を超えてどの程度扱い方が共通しているのか、あるいは変容しているのかは、地域同士のつながりを研究する上で重要である。

I期の中でも、藤内式期の事例は北杜市～富士見町に集中する。佐久周辺で釣手土器が出現するのは次の井戸尻式期～曾利I式期で、大深山遺跡4住例・25住外例、勝負沢遺跡H37例、長和町中道遺跡例、

郷土351号土坑例がある。中道例は顔面装飾が付されていたが1つを除いて打ち欠かれている点、大深山の4住例は焼住居、勝負沢例は床面出土という点で、甲府～伊那と共通する。土坑出土例は数が限られるが、分布集中域から離れており、完形率が低い状態で発見されるという共通性もある（綿田1999）。

II期は山梨・西関東方面の広い範囲に分布するタイプと、諏訪～松本周辺、あるいは飛騨周辺など比較的狭い範囲に分布するタイプがある。佐久周辺では前者の上田市淵ノ上遺跡例、後者の大深山遺跡25住例および、今回新報告の坂上遺跡例がある。

III期は、曾利式・唐草文系・郷土式など、深鉢の様式差に相当する、狭い範囲のみに分布するタイプが林立する。佐久～上田周辺にもまとまった一群があり、筆者は「郷土型」と呼ぶが、深鉢の郷土式と違い群馬では未発見である。郷土型の特徴は、この時期では珍しい顔面装飾を持つことであるが、多くの場合欠損している。宮平例の「煮沸」も他と異なったあり方かもしれない。

III期の後半には関東・中部・東海の実例は殆ど認められず、装飾も簡素なものとなる。一方で、北陸では、独自の形態を作り、1遺跡で複数例が住居外から出土するなど大きく変容しながら後期前葉まで継続する。

参考文献

- 鳥居龍蔵 1924『諏訪史第1巻、信濃教育会諏訪部会
藤森栄一 1965『釣手土器論』『月刊文化財』第19号
宮城孝之 1982『縄文時代中期の釣手土器』『中部高地の考古学Ⅱ』長野県考古学会
小野正文 1989『土器文様解説の一研究方法』『甲斐の成立と地方的展開』角川書店
諏訪市博物館 1999『縄文土器のふしぎな世界第二章』
新津 健 1999『縄文中期釣手土器考』『山梨県史研究』第7号
綿田弘実 1999『長野県富士見町札沢遺跡出土の釣手土器』『長野県立歴史館研究紀要』第5号
釈迦堂遺跡博物館 2009『炎を抱く器～やまなしの釣手土器～』
堤 隆 2010『ある釣手土器のライフヒストリー』『坪井清足先生卒寿記念論文集 下』
中村耕作 2013『縄文土器の儀礼利用と象徴操作』アム・プロモーション
宮内信雄 2019『化学分析から釣手土器を読む』『異形の造形』浅間縄文ミュージアム

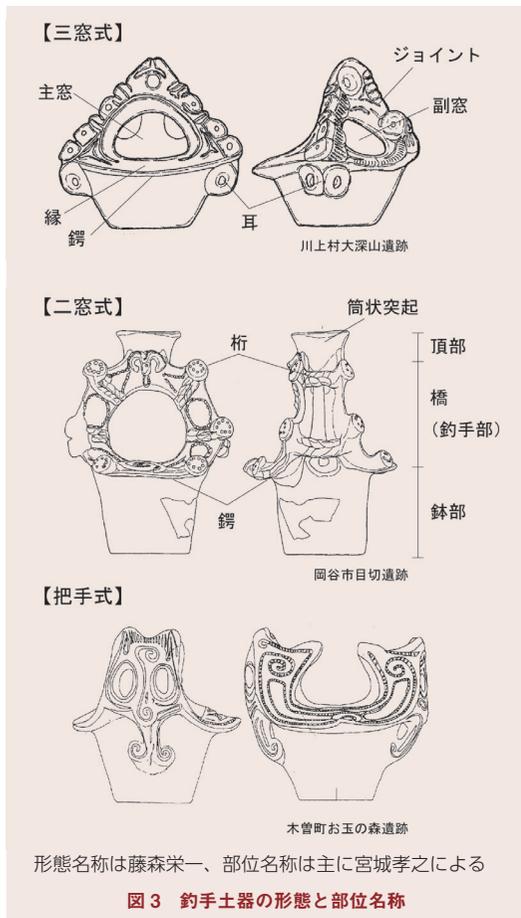


図3 釣手土器の形態と部位名称

北相木村坂上遺跡の釣手土器

藤森英二



北相木村の坂上遺跡は、相木川右岸の河岸段丘上に位置している。1998年の小規模な発掘調査では、縄文早期から後期の遺物が出土しているが、表採品等を含め、やはり多いのは縄文中期の土器である。現在のところ、中でも中期前半期のものが多いが、中期後葉と思われる釣手土器の破片が1点採集されている。

アーチ部だけの資料であるが、正面が大きく開き、背面は2つの開口部からなる三窓式の釣手土器と思われる。釣手土器上端には円形の突起があるが、上面はただ平らに成形され、文様等はない。釣手土器は沈線による施文で、末端がU字状に閉じた平行沈線を基本としている。

胎土には白色の粒子を多く含み、全体はやや暗い茶褐色であるが、釣手土器内側は黒く変色し、わずかではあるが炭化物の付着も見られる。内部で

火を灯した傍証となるだろうか。前出の中村耕作氏のご教示によると、中村編年(前頁)でⅡ期、文様は諏訪周辺の柳田型(中村図2-7)に近



図2 現在の坂上遺跡

いが、頂部突起の存在や三窓式という形態からは、山梨の真原A型(同8)や群馬の大平台型(同9)との関係も考慮する必要があるという。

縄文中期農耕論を唱えた藤森栄一は、様々な遺物をその文脈の中で解釈するが、釣手土器については、個体数の少なさや出土状況、さらに内面に残るススなどから、これを特別な儀礼などに用いるランプであると提唱した。その後も農耕論の否定肯定にかかわらず、このランプ説が根強い。しかし、資料や分析方法が整いつつある今日、これを改めて考えてみる必要も生じている。



図3 藤森栄一



図1 坂上遺跡の釣手土器(1/3) (北相木考古博物館)



大深山遺跡の仮面様香炉形土器

長崎 治

1 大深山遺跡

大深山遺跡は、長野県川上村の天狗山の南斜面、南に千曲川を望む、標高 1300m に近い場所に位置する。昭和 30 年代に発掘調査が行われ、51 ヶ所の住居址や多くの遺物が出土した。昭和 41 年に国の史跡に指定され、平成 30 年には日本遺産「星降る中部高地の縄文世界」の構成文化財となった。現在、発掘された住居址が円形状に窪み、それらが環状に広がっており、高所に位置する縄文時代中期の大規模な集落跡を見る事ができる。

平成 28 年から保存と活用に向けた発掘調査を文化庁の指導と日本大学の協力により進めている。

2 仮面様香炉形土器

人面香炉形土器と呼ばれる土器が、大深山遺跡から出土している。出土状況は不明な部分もあるが、報告書によれば、15 号竪穴の北壁上であり、住居址堀込より外側の出土である。ただし、15 号竪穴内の棚に置かれていたことに起因しているとの想定に言及している。また、この土器は、バラバラにつぶれることなくほぼ完全な形で出土しており（図 2）、その点からも、他の土器とは異なる出土状況を示している。

土器（図 3.4）は、裏面の二つの円形の窓と中央を縦に走る隆帯などによって、人面を思わせるかのような造形となっている。また、全体的に黒色を呈

するが、正面の上部や内部の天井部などに黒色の付着物がみられる。時期は、縄文時代中期戸尻式期と考えられる。

平成 30 年に長野県宝の指定を受け、仮面様香炉形土器とも称されるようになった。



図 2 仮面様香炉形土器の出土状態



図 3 仮面様香炉形土器の側面・正面



図 1 大深山遺跡と復元住居



図4 仮面様香炉形土器 (川上村教育委員会蔵)

Photo T.Ogawa

3つの釣手土器

— 大深山遺跡の事例から —

堤 隆

1 はじめに

千曲川の源流南佐久郡川上村の大深山遺跡は、1350m という最高標高にある縄文中期の拠点集落として知られ、国史跡に指定されている。ここでは4点の釣手土器が出土しているが、うち3点について今回観察する機会を得たので、ここに検討してみたい。

2 三窓式釣手土器

帰属遺構：本釣手土器は、川上村大深山遺跡第四号竪穴出土とされる資料である。「出土とされる」としたのは、報告者の八幡一郎により「この土器は第三号と第四号との境、第十号寄り」から出土しおそらく第四号であろう記載されており（八幡 1976）、はっきりした出土状態と帰属が不明なためである。

形態：この釣手土器は、三窓式と呼ばれる形態の資

料で、浅鉢部から延びる3本のアーチが頂点で山形に合流する。一方が単窓（図1・A面）、もう一方は二つの窓からなる複窓（図1・B面）を呈する。浅鉢部の縁に全体に鏝がめぐるが、横位からみると単窓側の鏝が唇のように突き出しているのが特徴的である。

単窓側からみた左右のアーチには3つの竹輪状の突起が付され、さらに鏝の下に続いて耳（環状把手）



図1 三窓式釣手土器 (約 1/4) (川上村教育委員会蔵)

が左右につけられる。複窓側からみた竹輪状突起の表面には連続刺突が並行して施され、落花生の表面のような文様をなしている。アーチには、沈線や三叉文などが施され、鏝の上部にも、キャピラ状の連続刺突文や三叉文がみられる。

分量は、高さ 181.5mm、幅 200mm、奥行き 187mm、浅鉢内部幅 142mm、浅鉢内部奥行き 137mm、浅鉢内部深さ 66mm を測る。

残存状況：アーチ部の竹輪状突起の縁部を都合4か所を僅かに欠くが、ほぼ完形品といえる。ただし、アーチ部や浅鉢部にヒビ割れが生じた部分がある。

炭化：この釣手にはきわめて特徴的な炭化がみられ以下に記載する。

- ① まず、単窓側外面では、浅鉢部の向かって右下半部を残し、ほぼ全面が炭化している。また、炭化による剥落が著しい部分がある。
- ② 続いて複窓側外面では、環状把手と両側アーチ部は顕著な炭化がみられるが、浅鉢部は炭化していない。
- ③ 外面底部は、一部を残し、ほぼ炭化している。
- ④ 外面の竹輪状突起および環状把手内部もいずれも炭化が顕著である。
- ⑤ 浅鉢部内面は、外面炭化部と同一個所が、炭化とまではいえるかどうかかわからないが、黒色変化している。
- ⑥ アーチ部の内面も、外面炭化部と同一個所が炭化している。

すなわち、底部外面、浅鉢部外面、アーチ外面、アーチ内面は顕著に炭化した部分があり、外面から大きく火を被った様子がうかがえる。また、外面の環状突起の内側まで炭化がみられる。おそらく底部外面側から大きく炎が包みこみ、炎の先端はアーチ外面のみならずアーチ内面を焦がしたものと考えられる。加えて外面の環状突起内部まで炎が焦がしたことが観察からわかる。

一方、浅鉢部の内面は、外面が焼けていない部分は炭化がみられず、外面の炭化が激しい部分は、それに呼応して若干の炭化がみられた。外面の焼けに呼応して、内部も若干焦げたものと考えられる。

おそらく写真のB面側の非黒色部分が、地面側に寝ころび、横位からその中央軸に炎が当たったものの、地面側と天側の非黒色部分には炎が当たらなかったことがうかがえる。

本釣手土器が、横に転び、底部から頂上部が炎に包まれる様は、囲炉裏で火に掛けられたというより、住居の焼失などにもなうものと考えることができよう。これは第四号竪穴の以下の説明とも整合するものである。第四号「竪穴の北壁直下、炉址から凡そ1.5m離れた場所に、長さ20cm、幅12cmの炭化した栗材が横たわっており、その附近一帯に灰や焼土が拡がっておった。したがってその栗材は焼け落ちた建物の用材と判断され、第四号は火災を蒙ったものと推測されたのである」(八幡前掲)。

一方、釣手土器はランプなどといわれるが、本資料の内部の炭化は、外面からの火の影響によるもので、内部で火を灯したことなどによる炭化は認められなかった。

諏訪市穴場遺跡の釣手も焼失住居から発見されているが、故意に火を放たれた可能性があり、本例も不慮の焼失というよりは、家屋に残して故意に火を放たれた可能性が捨てきれない。綿田は釣手土器の登場が「火にまつわる屋内祭祀の発達」と関連すると指摘しており(綿田1999)、注視される。

3 二窓式釣手土器

遺構：この釣手土器は、第25号竪穴の床面西寄りピットに正位で納められていた(図2写真)。写真の出土状態では釣手の上部を欠くが、遺物それ自体は上部も残る。その釣手上部がどこから出土しているかは不明である。

形態：この釣手土器は、表裏にそれぞれ大きな窓が開くもので、二窓式の範疇に入り、両側面のアーチ部には2つの三角小窓が開くものである。浅鉢部の両側から伸びるアーチは頂点で合流する。

一方の窓側は(A面)、頂部と両サイドにW字状の粘土ヒモが貼り付けられ、鏝の前庭部にも蛇行する粘土ヒモが貼り付けられる。アーチ部には2条の半截竹管文がめぐる。鏝は、反対面より顕著にせり出している。

反対の窓側は(B面)、頂部にW字状の粘土ヒモ貼った痕跡が残り、そこから垂下する蛇行粘土ヒモの貼り付けがある。また、両サイドにW字状の粘土ヒモが貼り付けられ、鏝の前庭部にも蛇行する粘土ヒモが貼り付けられる。アーチ部には1条の半截竹管文がめぐる。鏝のせり出しが、A面側より浅い。



図2 二窓式釣手土器(約1/3)(川上村教育委員会蔵)

赤色塗彩：外面の表裏アーチ部にはわずかな赤彩の痕跡が残る(写真○部分)。一方、浅鉢部内面、浅鉢部内面およびアーチ部内面には赤彩は残らない。外面の一部か全部かは分からないが赤彩のなされた土器だったことがうかがえる。

法量：高さ146mm、幅132mm、奥行き140mm、浅鉢内部幅103mm、浅鉢内部奥行き99mm、浅鉢内部深さ45mmを測る。

残存状況：アーチ部の表裏が剥落する以外は、ほぼ完形に復元されたものである。ただし、アーチ部や浅鉢部にヒビ割れが生じた部分がある。アーチ部のW字状の粘土ヒモの剥離が人為か自然かは判断しかねるが、顔面相当部のここだけないということは人為も考えられる。

黒色化・炭化：この釣手は、前者にくらべると黒色化は顕著でなく、炭化はみられない。

① 浅鉢部の外面では、胴部に2か所黒斑がみられる。2か所の黒斑は、焼成時のものか、オキ火のコゲなのかはわからない。底部外面は黒斑はみられない。アーチ部外面も黒斑はみられない。

② 浅鉢部内面は、外面に比べると黒色化がみられる。ただし、スス・コゲの付着はみられない。

③ アーチ部内面は、外面に比べると黒色化がみられる。ただし、スス・コゲの付着はみられない。

②・③の状況から内部で火が灯された可能性は排除できない。

4 把手式釣手土器

遺構：大深山遺跡第29号竪穴において口縁を内側に向け横位置(横倒し)で出土した、とされる。

形態：いわゆる把手式の釣手土器で、左右に直方体の把手がくの字状に付く。その把手部分には、天に



図3 把手式釣手土器(約1/3)(川上村教育委員会蔵)

1つ、背面に2つの円孔が開けられ、その内部においてトンネル状に貫通している。また、そのサイドには幅広の沈線による渦巻文2つがある。浅鉢の口縁部にも2本の沈線と2つの渦巻文がある。浅鉢胴部外面にも渦巻文がめぐり、その内部を細い平行沈線が埋めている。

法量：高さ190mm、最大幅210mm、奥行き190mm、浅鉢内部幅170mm、浅鉢内部奥行き160mm、浅鉢外部底径78mmを測る。

残存状況：把手部のA面向かって右側を大きく欠く。また、把手部のA面の左上端部を一部欠く。他は破損がみられない。

黒色化・炭化：浅鉢部の外面では、底部から胴部の一部に黒斑がみられる。一方、内面の黒色化・炭化は認められない。

5 まとめ

藤森栄一は、「大深山例は三例とも油煙を残し、- 中略 - 釣手土器が、その内部で火の燃やされるための土器であったことは、以上ほぼ確実といって差し支えないだろう」としている(藤森1965)。

藤森の指摘する3例の中に本資料の1・2も含まれていると思うが、これまで詳述したように、残念ながら藤森の解釈のような積極的な証拠(油煙)は残されていない。

引用文献

藤森栄一 1965「釣手土器論—縄文農耕肯定論の一資料として—」『月刊文化財』19 pp.12-15

八幡一郎 1976『信濃大深山遺跡』p.232 川上村教育委員会

■ 釣手土器の見られるミュージアム



■ 川上村文化センター
大深山遺跡の釣手土器4点を常設展示。他に大深山の主要土器が見られ、川上村内の旧石器時代資料も展示している。



■ 浅間縄文ミュージアム
釣手土器ほか宮平遺跡の遺物を常設展示。重要文化財の川原田遺跡焼町土器も公開。縄文土器作りなどの体験もできる。



郷土遺跡の釣手土器

桜井秀雄

1 郷土遺跡

小諸市東雲区に所在する郷土遺跡は、国道18号を上がった小諸高校の西側に位置し、標高830m前後の浅間山南麓の傾斜面上に立地する。佐久地域でも古くから知られた縄文遺跡であったが、平成4(1992)～7(1995)年に行われた上信越自動車道建設に伴う発掘調査で縄文時代中期後半から後期初頭の竪穴住居跡107軒等が発見され、浅間山南麓を代表する大集落遺跡であることが判明した。この発掘調査において、2点の釣手土器が出土している。

2 351号土坑の釣手土器(図3)

本例は、井戸尻Ⅲ式期の351号土坑(径82×70cm×高さ22cm)から、若干の欠損部分はあるもののほぼ完形の状態で出土した。土坑から出土する釣手土器は全国でも10例程しかなく、そのなかでも完形状態でみつかったものは極めて希少である。私は、住居での使用後に集落の境界祭祀に関わって意図的に埋納された可能性が高いと考えている(桜井2002「井戸尻Ⅲ式期の土器を埋設する土坑について」『長野県埋蔵文化財センター紀要9』)。

釣手部は三窓式となる橋を持つ。鉢部の下部外面には環状に黒変している箇所があり、火にかけられた可能性がある。幅および高さはともに22.5cm、底径は11.8cmをはかる。

橋頂部には立体的な渦巻きが置かれているが、こ

れはとぐろを巻いた蛇尾を表現しているとみてよいだろう。そして、その下に続く釣手の部分に施された曲線的な隆起文様は蛇体をあらわしているものとみたい。蛇が橋頂部から下へ向かって釣手土器にからみつくような情景が想起されないだろうか。

3 126号竪穴住居跡の釣手土器(図4)

本例は、加普利EⅢ式古段階期の126号竪穴住居跡(東西6.4m×南北5.4m)から出土した。鉢部の上にアーチ状の橋を架けた釣手部をもつ二窓式である。釣手部は石囲炉の北西側付近の埋土上面から、桁のひとつが欠損していたものの、橋の形は保たれた状態でみつかった。一方の鉢部も埋土からの出土であったが、こちらは欠損した部分が目立ち、復元箇所が多くなっている。釣手部の幅は桁を含めて30cm、高さは推定だが28.5cm前後とみられる。

橋頂部には人面が表現され、左右には渦巻文が施されている。こうしたタイプは、東信地域に特徴的であり、本例を典型に「郷土型釣手土器」と呼ばれているが、橋の両面に人面をもつものは珍しい。

A面の人面は、沈線で二つの目と口を表現している。鼻は隆帯で形成されたとみられるが欠損している。意図的に破壊された可能性が高いと考えている。B面は目のみの表現であったが左目部分は欠損している。頂部には筒状突起を創出しており、左右の橋にはそれぞれ2つの桁が付けられていたこともわか



図1 郷土遺跡から浅間山を望む(平成5(1993)年)

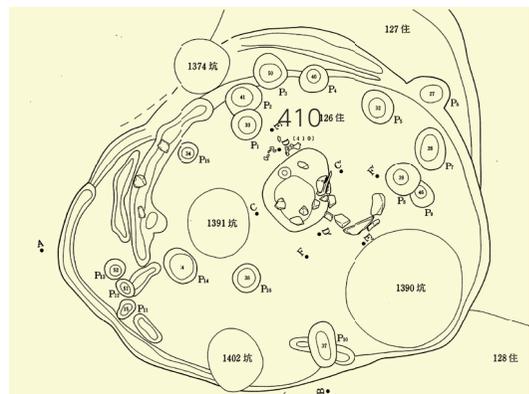


図2 126号竪穴住居跡(410が釣手土器)

る。

なお、同じ「郷土型」のなかでも、佐久市の寄山遺跡H3号住居跡出土例とは形状が実によく似ている。人面が両面にあることも共通している。相違と

いえば、本例よりも橋頂部が丸みを帯び筒状とならないこと、橋の渦巻文の回転方向が1か所を除き、時計回りの本例とは逆であることをあげる程度であり、その相似性の高さが注目される。





いわゆる郷土型釣手土器と他の一例

— 佐久市寄山遺跡・勝負沢遺跡の出土資料 — 堤 隆

1 はじめに

佐久市寄山遺跡および勝負沢遺跡では、2点の釣手土器が出土した（小林編 1995）。佐久市教育委員会の許可を得て、ここに再録するものである。

2 二窓式釣手土器（図1）

本釣手土器は、寄山遺跡 3A 地区の H3 号住居址から出土した。二窓式で、器体の半分を欠損する。高さ 29.5cm、他の法量は欠損により不明だが、復元による推定幅は 28.5cm、推定厚 24cm、推定底径 11.4cm、浅鉢内部の深さは 9cm を測る。

A 面では、器体の左半分を欠くが、アーチ部の頂点には、その一部が破壊されているものの、沈線による細長の眼が二つ描かれ、小さな鼻と鼻孔 2つが見える。その下には、わずかな横位の沈線が観察でき、口とも見られる。

B 面では、器体の左半分を欠くが、アーチ部の頂点には、その一部が破壊されているものの、沈線による細長の眼が二つ描かれ、小さな鼻と鼻孔 2つが見える。口の相当部分に関しては、破損により残っていない。ただし A 面と同様な口があったと見て



図1 寄山遺跡の二窓式釣手土器
（表裏側面約 1/4）
（佐久市教育委員会蔵）

よいだろう。

側面は、板状の2枚を繋ぎ2つの橋がかかる。

土器の外側浅鉢部および外側アーチ部にはスス・コゲ、黒色化はみられない。対して、浅鉢部内側は黒色化、アーチ部内側下半分も黒色化するが、スス・コゲは認められない。底部外側も黒色化する。

3 三窓式釣手土器 (図2)

本釣手土器は、勝負沢遺跡5地区のH37号住居址の壁際から出土した(写真)。三窓式で、器体の半分を欠損する。法量は欠損により不明だが、復元による推定高22cm、推定幅21.5cm、推定厚16cm、推定底径9cm、浅鉢内部の深さは6cmを測る。

A面では、器体の左半分を大きく欠き、アーチ部の頂点が残らないため、顔面表現等があったのかどうかはわからない。残存する右側の釣手部には、沈線による隅丸方形の区画とその内部に2本の並行線が引かれ、いわゆる耳穴が開く。

B面は、いわゆる複窓で、円窓の縁を隆帯が巡る。頂点部と向って右半分、正面部を欠損する。

外面は、B面の右の一部に黒変がある以外は、底部も含め、全体に黒変は認められない。浅鉢部内側

は、スス・コゲの付着はないが、黒変が認められ、アーチ部下位まで続いている。

4 まとめ

まず、二窓式については、「郷土型」(中村2010)とされるもので、曾利Ⅲ式期の位置づけが考えられる。この資料は、郷土遺跡出土の当該資料(P3)と瓜二つである。三窓式の釣手土器も、中村耕作の教示によれば曾利Ⅲ式期に位置づけられる。

参考文献

- 中村耕作 2010『釣手土器の展開過程』『史葉』3 pp.21-45
加藤建設株式会社
小林真寿編 1995『中条峰遺跡 寄山遺跡群勝負沢遺跡1・寄山遺跡・寄山古墳2』佐久市教育委員会





宮平遺跡の釣手土器

堤 隆

本釣手土器は、御代田町の宮平遺跡のJ-33号住居址から出土した。高さ26.6cm、幅24.8cm、底径11.5cm、浅鉢内部の深さは8.8cmを測る。

アーチ部の頂点には、その一部が破壊されているものの（おそらく意図的に）、沈線による細長の眼が二つ描かれ、鼻と鼻孔、鼻の下には人中といわれる筋が入り、人面を表現する。アーチの空間部は、あぐりと開けた口に見立てていると思われる。

この顔面表現の裏面であるが、その該当部分のみが完全に破壊されており、同様に顔があったか判断できない（図2）。が、おそらく破壊されているということは、逆説的に考えると存在したということだろう。

特徴的なのは、鉢部外面に多量のススが付着していることである。このことは、この釣手土器が何度も繰り返し火に掛けられたことを物語る（図2）。

いずれにせよこの釣手は、煮沸に供された後、顔面部が意図的に破壊され、廃棄されたとみられる。本釣手土器は、本誌（P3）の中村耕作編年でいうと、曾利Ⅲ式期に位置づけられる。また、東京大学総合研究博物館による土器付着炭化物の放射性炭素年代は4623～4835calBPとなっている。



図2 釣手土器の破損状況



Photo T.Ogawa

図1 宮平遺跡の釣手土器（浅間縄文ミュージアム蔵）



図3 煮沸に供された釣手土器（イメージ写真）

ドングリなどC3植物を煮たという安定同位体による推定結果が東京大学総合研究博物館の宮内信雄氏より出されている。

■ 編集後記

『佐久考古通信』は、今117号からオールカラーとなりました。デザインも一新したため、編集に手間取り会員のお手元に届くのが遅くなりました。お詫び申し上げます。

縄文ブームといわれる昨今、確かにギャルまで“かわいい”と土偶を愛でていますが、いつまで続くのでしょうか？

今号は釣手土器を特集しましたが、次号も注目の特集（たぶん馬具）をご期待ください。

（堤 隆）